

別紙 1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 森岡 悠

論 文 題 目


The first point prevalence survey of health care-associated infection and antimicrobial use in a Japanese university hospital: A pilot study

(日本の大学病院における医療関連感染症と抗微生物薬使用に関する最初の point prevalence survey : 試験的研究)

論文審査担当者


主 査 委員

名古屋大学教授

荒川 直親 


名古屋大学教授

委員

木村 宏 


名古屋大学教授

委員

長谷川 好規 

名古屋大学教授

指導教授

八木 哲也 

論文審査の結果の要旨 1





今回、日本では行われてたことがない point prevalence survey(PPS)という疫学調査手法を用いて、名古屋大学医学部附属病院(名大病院)における感染症に関する病院疫学を明らかにした。その結果、医療関連感染症(HAI)は全入院患者の 10.1%に生じ、抗微生物薬は 36.6%の患者に投与がなされていた。薬剤耐性菌の検出状況、カルバペネム系抗菌薬が HAI の治療薬として頻用されている状況や、周術期抗菌薬が経口薬で長期間投与されている状況も明らかとなり、日本独自の病院疫学が明らかとなった。本研究に対し、以下の点を議論した。

1. あくまで一時点での結果であり、感染対策が奏功した結果とまでは言えない。アルコール使用量の評価や、経年的な評価を要する。院内検出の *E. coli* と *K. pneumoniae* の ESBL 産生率が 20%, 10%であることを考えれば今回の検出率(腸内細菌科細菌のうち、20%)は妥当な検出率と考えられる。
2. 単施設研究の限界であり、大学病院全体・日本の疫学を全体を反映しているわけではない。大学病院単独の PPS は報告が乏しく、比較対象が乏しい状況である。今後、世界のデータと比較するには、大学病院での多施設 PPS が大学病院の疫学、或いは日本全体の疫学を示すには、多施設での施行が必要であると考えられる。
3. McCabe score という重症度を見るスコアでは、Eurosurveillance 2012(vol.17)のヨーロッパの報告と比して、基礎疾患として重症度が高いというわけでもない。しかし、デバイス留置を要しない患者が全体の 54.5%であった点では、デバイスを用いた治療を用いる必要のない患者が多数いることを示唆している。14 日までの入院期間の患者の HAI 有病率は 2.9%と低いが、31 日以上入院している患者の HAI 有病率は 16.6%と高値である。HAI は定義上、「入院して 48 時間以上経過して発症した感染症」であるため、長期入院中に感染イベントが起きれば自動的に HAI にカウントされる。そのため、ADL 不良の高齢者で退院ができない患者や(誤嚥性肺炎、UTI リスク)、侵襲性の高い化学療法・手術を行った方、長期入院を継続しながら化学療法を行う方は、HAI を起こすハイリスクであり、入院患者の二極化(軽症患者と長期入院患者)が PPS にて示された結果と考える。
4. 市中肺炎は HAI として扱われてないため、18 例は全例 HAI と扱われる。肺炎 18 例中、4 例がデバイス関連感染症と判定されており、VAP と判断された。
5. 患者背景・未介入のデバイス留置率・耐性菌保菌率についてはほぼ変化が見られない。周術期抗菌薬の適正化を目的に外科系各科に介入した結果、周術期抗菌薬投与薬剤は経口薬が減少していた(2014 年 55 処方⇒2016 年 27 処方)。

本研究は、日本の大学病院で初の PPS を行うことで、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士(医学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏 名	森岡 悠
試験担当者		主 査	  	
		指導教授		

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 第3世代のセファロスポリン系薬剤耐性の腸内細菌科細菌が起因菌に占める割合は低い。感染対策が奏功していることを反映した結果かどうか
2. 世界での PPS は、1 次～3 次を含めた様々な病院を含んでいる。当院でのデータで比較する場合、背景をそろえる必要がある点について
3. 比較的軽症な患者が入院しているにも関わらず、医療関連感染症の有病率が高い点について
4. 肺炎における人工呼吸器関連肺炎が占める割合について
5. 経年的な変化がみられているのかという点について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、臨床感染統御学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。